

北海道を代表する動物といえば、前号で紹介した罨と、蝦夷鹿・キタキツネそして蝦夷リスであろう。

中でも蝦夷リスは、平野部でも比較的良く見かけられるということ、ピョコンと後ろ足で立って人間の方を向いたときの姿が愛らしいということ、森と上手く共生しているということ等から森の人気者であり、森の守り神とも言われる。蝦夷リスというのはリス科で、欧州、ロシア、中国北東部等に広く分布しているキタリスの一亜種であり、日本では北海道だけにしかない。

帯広駐屯地の師団司令部前、左右の築山にも番（つがい）だろうか、2匹が住んでおり、朝な夕なと右から左またはその逆とチョコチョコと移動している。2匹居る事は同時に見かけたので間違いはないが、番かどうかは巣を共同使用しているかどうかが未確認であるので、何ともいえぬ。時には、朝鮮五葉（朝鮮五葉については文末参照）の松ボックリを銜えて移動している。リスが昨年収集して貯蔵していた松ボックリを掘り出して食べた跡がある。

この朝鮮五葉の松ボックリは下の写真を見て頂ければ解るように落葉松等に比して数倍はあろう。



(追ってデポの写真に掲載する)

この松ボックリが蝦夷リスの大好物である。主食といえるかも知れぬ。松ボックリの種の数は一〇〇個以上であり、人間が食べても美味しい。中華料理には欠かせないものでもある。松ボックリを器用に分解して松脂をものともせず実を取り出して食べることが出来るのは蝦夷リスだけではなかろうか。実は高カロリーである。高カロリーで蝦夷リスにうってつけと思われるのが胡桃であろう。胡桃の堅い殻を割って食べるという。十勝地方には蝦夷リスの好物である朝鮮五葉や胡桃が多い。私の毎朝のジョギングコースである緑ヶ丘公園には、この朝鮮五葉松が沢山植えられている。蝦夷リスにとっては天国かな。

蝦夷リスはシマリスと違って冬眠しないので、一年中見ることが出来る。長い冬を越す為に蝦夷リスは「貯食」独特の習性を持っている。秋が近づき、朝鮮ゴヨウ、くるみ、コクワ、

ヤマブドウ、ドングリ等をせっせと集めて貯蔵を始める。貯蔵個所は、数千ヶ所に分散しているとも言われ、土中や木の穴または木の枝に掛けたりする。穴を掘って木の実を入れ、両手で落ち葉をかぶせる。この貯食された個所をデポと兵站幕僚は呼んでいたが、正にデポである。師団司令部前にもそのデポがある筈だ。現在必死に捜索中である。これら埋められた木の実のうち、リスが忘れてたりして食べられなかったものが春になって芽吹いて、いつしか大きくなる。この様に自然も輪廻し、森の小動物と樹木が共生しているのである。リスはデポを記憶と嗅覚で探すらしい。

蝦夷リスの行動範囲は、雌雄また時期にもより異なるけれども、1万㎡(100m×100m)～16万㎡である。蝦夷リスは、北海道全域の平野部から標高1600mぐらいの常緑及び落葉針葉樹林に生息しており、頭胴長は22～23cm、尾長は17～20cm、体重300～410gである。蝦夷リスは、樹上性のモモンガ、地上性の蝦夷シマリスと違って樹上、地上何れをも行動範囲としている。樹上にある時は体長に匹敵するような長い尻尾で絶妙なバランスをとっているようだ。あの尻尾無くして軽快に樹上を行動出来ないのではなからうか。昼行性なので、日中よく行動する筈だが、矢張り朝・夕の活動が活発だ。リスの巣を探そうと思うのだが、軽快機敏な行動についていけぬ、白銀の中ではリスも足跡を消す訳にもいかず、容易に辿り着けそうだ。殆どの時間を木の上で過ごしているが、秋の食料集めの時期には、地上を走り廻っている。為に、まれに交通事故に遭うこともある。リスの交通事故被害を防ぐ目的で市道を横断するリス専用のブリッジが掛けられているところもある。

2月から6月が繁殖期であり、この時期雌と雄が追いかけてこしたりしている。雌を巡る激しい争奪戦が繰り広げられることもある。目出度く雌を獲得した雄は、雌に一日だけ許された交尾の機会を辛抱強く待つ。雌は40日弱の妊娠期間を経て3～6頭の子供を出産する。子育ては雌のみが行うという。リスの子供は生後2ヶ月で自力で採食出来るようになる。

朝鮮五葉：*Pinus karaiensis*、別名チョウセンマツ、花期：春、山地に生える常緑高木、葉は、5個が束生し、長さ6～12cmである。この朝鮮五葉は、種から育てて14年目から実をつける。ただ、欠点は二年に一遍しか実をつけないことだ。

(参考：百科事典、各種HP等)